

定年後の居場所

宮岡 等

各職場では退職者を送り、新たな仲間を迎える時期である。先日、ある学会で役職者に定年を設けるかどうかが話題になった。賛成派は「一定の年齢になれば心身ともに衰えるのだから退くのは当然である」、「後進が活躍する場をせばめてはいけない」などと、反対派は「衰えには個人差が大きいので一定の年齢を決める必要はない」、「必要のない役職者であれば選挙で選ばなければよいだけのこと」、「後進は場を譲ってもらうのではなく奪い取るもの」などと主張した。

本務が現役のうちには限りなく多忙な方が退職後、学会などで主要な役職に就いて後輩を導き、その発展に寄与しているのを見ると、新たな活躍とはこういうものかと感動すら覚えることがある。しかし実際は学問の分野でも、この人の地位は後進の人たちの希望なのか、本人の希望に後進が反論できないだけなのかと疑問に感じるものが少なくない。当人は、自分が主要なポストにいることを周囲がどう受け止めているかよりも、自分がたしかに役立っていると確信しているように見える。一定の年齢を過ぎた者が重要なポストに座る力動は複雑であり、学問だけでなく経営、経済、政治的要請などが加わるとさらに事態は複雑になる。

不要な人であれば、後進から退いてもらうように促し、その地位を奪うくらいであつてもよいという考えは理解できる。しかし、日本社会の人間関係の中でそれができる場はまだ少ない。本当に必要な人にだけ残ってほしいと言える土壌も十分には育っていないように思う。

一定の年齢を過ぎれば、存在が後進の道を塞いでしまう可能性を考えよう、後進の人たちから求められたら意見を言い、どうしても言いたいことがあるれば彼らが反論しやすいように考えながら意見を言いたい。この巻頭言は私の誓約書でもある。